

## 特別講演

### 海外の地震津波調査とマラリア・狂犬病・肝炎の予防について 都司 嘉宣（前・環境安全委員長）

われわれ日本の津波研究者が、海外で大規模な地震津波が起きたとき、大挙して海外調査チームを編成して現地に乗込み、という事が始まったのは1992年の中米ニカラグア国の津波以来のことであった。それ以前には、およそ10年近くも海外で大規模な津波災害は起きていなかったのである。ところが、このニカラグア地震津波以来、世界中・とくに西太平洋の地域で、大きな津波地震が頻発するようになった。ニカラグア地震津波のわずか3ヶ月あとに、インドネシア・フローレス島の北海岸で大津波が起きて約2000人の人が死亡した。このときは、筆者は国際調査団の団長を始めてやらされて、日韓中米インドネシアの5カ国の研究者のまとめ役をつとめた。そのとき、心配であったことのひとつが、被災現地の衛生状態、ことに伝染病のことであった。現地は第2次世界大戦中に日本軍兵士がマラリアで多く死亡した場所であるという。文部省への突発災害の科研費の申請、国内研究者への団編成の連絡、現地インドネシアの研究者との連絡、米中韓の研究者との現地合流ホテルの交渉などがいっぺんに押し掛けてきて、文字通り1日3時間ぐらいしか寝る間が無かったと記憶する。で、当時海外旅行の予防接種というと銀座の内外クリニック。ここで、A型肝炎、破傷風、狂犬病の予防注射をしてもらおう。マラリアは現地の薬局で着いたらすぐ呑みなさいと言われた。こういう予防注射は、最初に打って1週間後ぐらいから効果が出始めるとのこと。ことに狂犬病は、今日打って、1週間後に2回目を打ってその後始めて有効になるんだそうだ。この時は出発の前日、予防注射を受けた。これじゃ遅いのである。知らぬとは言いながら……。秋田から参加した団員、韓国からの団員……。だれも予防接種を受けていない。いま思うと、実に危ない！ほとんど無防備状態でよくも危険なところに行ったもんだ。（この3種混合、2万5千円なり。当時は自費。今は公費）

数年後、安全衛生管理士第1種免許を持ち、産業医の大久保靖司医師にうかがうと、「肝炎・破傷風・狂犬病、それにアフリカへ行く場合には黄熱病の予防接種をうけてください。なぜなら、この4種類は、必ず死ぬからです。狂犬病にかかった人で、死ななかった人は居ません。インドでは毎年2万人が死んでます」。あの一、津波で海岸の集落が完璧に流され、人間が多く死んでも、飼い犬は生き残ることが多いものです。被災後、えさをもらえなくなったイヌが、われわれの調査中、親しげにわれわれに寄ってきます。みなさん、どうしますか……。？アメリカ・オーストラリアは狂犬病のない国。中国南部はヤバイ。

地下鉄千代田線・日比谷駅A5番出口、東宝ツインタワービル・地下2階、日比谷クリニック、おすすめ。13時-14時半は休み。2004年インドネシアスマトラ津波の時、「そろそろいっちゃうと噂してました。狂犬病は今日打って、1週間後打って、2週間後打って、そのあとは**25年後\***に打ちます」。

・・・帰国後

「では都司さん、次は82才になったら打ちに来てください」

「はっ、はい・・・？」

\*運営委員会注 狂犬病予防注射の有効期限については要確認ねがいます